

1、留学に関する一般的な情報

留学前の履修状況

留学期間

留学時の身分

単位交換について

プログラムへの申し込みについて

プログラムの特徴について

奨学金について

選考通過後の手続き、保険等について

寮について

生活費及びその他の環境について

2、講義について

憲法学

中国政治概論

中国アフリカ関係

メディアと中国社会

3、語学と旅行

語学について

鄭州、開封、洛陽、西安

太原、武漢

広州、澳門、香港、深圳、長沙、南昌

貴州、春節

4、中国で感じたこと

中国で生きる人

中国の経済と社会—成長とそのひずみ—

中国の政治、社会—中国の価値観と「正しさ」—

最後に

1、 留学に関する一般的な情報

・留学前の履修状況

2016年度文科一類入学。その後第2学年Aセメスターまで受講、法学部第三類へ進学。第2学年は法学部の駒場持ち出し科目を中心に受講。

・留学期間

2018年2月～2019年1月（うち、2018年7～9月上旬は夏季期間中に北京大学の寮に留まることが出来ないため帰国）。

・留学時の身分

キャンパスアジアプログラムを利用した交換留学生という扱い。法学部に対しては、留学申請書等の書類を提出し(法学部窓口で教えてもらえる)、法学部の教授会での承認を経る必要がある。

・単位交換について

1学期目（2018年2～6月）は、東京大学の在籍学部が4月に教養学部から法学部に代わり2つにまたがってしまうため、例外なく認められなかった（教養学部からの進学先がどこであっても基本的に同じであると考えられるが要相談）。

2学期目(2018年9月～2019年1月)は、単位交換ができることとなった。しかしながら、(少なくとも法学部は)私のように2年生の前期教養学部からの進学のタイミングと留学が重なる場合、2学期目はその期間中進学先の学部にも所属していたとしても、2学期目が1学期目の単純な延長であるとみなされると、単位交換が認められないという方針であるようだ（教養学部中の留学の延長であり、法学部との間の留学と認められないため）。私の場合は、1学期目の途中で、改めて書類提出や面接を経るなど、手続き上は、完全に別枠として2学期目分の留学に応募して、選ばれているため、外面上は同じプログラムの延長でも、実際は「法学部生」として応募した別枠の留学であったと認められ、単位交換が可能となった。

今後、3年生のSセメスターの段階で留学を開始される方については、進学先の教務課と十分に連絡を取るようにはしていただきたい。

・プログラムへの申し込みについて

キャンパスアジアのHPに記載の通りに申し込めばよい。選考過程で面接がある。面接は私が経験した限りでは、担当の先生方5人ほどが面接官として、留学を志した理由等を質問してくる。語学力をみるため、簡単に2・3問英語でのやり取りもあった。キャンパスアジアプログラムの趣旨がなんであるのか事前に確認して

から志望理由等を作成すると良いのかもしれない。中国語力は問われなかった。

全学交換留学等に比べても選考の期間は非常に短く2週間以内に結果が知らされる。留学者数は、2017年秋4人、2018年春4人、2018年秋4人、2019年春5人。

・プログラムの特徴について

全学交換留学で20人もの枠が北京大には用意されている中で、それに対してキャンパスアジアプログラムが持つ特徴を考えたい。

- －申請手続きが簡素である。推薦状の提出は不要であり、選考期間も短い。
- －1学期間の留学であれば、中国政府奨学金に加え短期留学奨学金が得られる(後述)ため、全学交換留学より資金的にやや優位。
- －元培学院に所属する。同学院はあらゆる分野の学生が在籍する、北京大の学部の中でも、最も人気が高く優秀な学生が集まる学部である。講義はどの分野であっても優先的に履修することが出来る。(この点全学交換もほぼ同じ)
- －キャンパスアジアプログラムの学生向けのツアーがある。秋学期は山西省太原と湖北省武漢を10人ほどの学生と一緒に各3日程度の日程で訪問し、大学や研究施設、工場、博物館等を見学した。すべて無料。参加学生は北京大本科生の他日本、韓国、香港など。
- －希望すれば、2学期目は北京大(ソウル大)へ移動して、1年で2か国を回ることも申請次第で可能。

以上のようにいくつかの利点があるが、プログラムが掲げる目標に対して、特段際立ったサポートやリソースが用意されているわけではない。むしろ、「中国語の語学クラスを受講できない¹」という大きな欠点もあるため、留学の目的や時期に合わせて自身で選択する必要がある。

・奨学金について

1学期目は、中国政府奨学金(3000元/月)が支給され、北京大の外国人学生向けの寮に完全に無料で住むことが出来る。また、同時に東京大学の短期留学奨学金に申し込むことが出来るため、こちらの選考に通ることが出来れば、60000円/月が支

¹ 北京大学には「对外漢語学院」という中国語の語学教育専門の学部が存在し、ここがほぼすべての語学教育を担っている。キャンパスアジアプログラムの学生はこの学部の講義を留学規定により取ることが出来ない。他の学部に若干語学クラスはあるが、十分な内容ではない。したがって、中国語だけを密に勉強したいと考えるならば、キャンパスアジアプログラムに応募すべきでない。

給される。

2学期目は、残念ながら1学期目と異なり中国政府奨学金は支給されない。加えて、外国人学生向けの寮に住むことが出来なくなるため、代わりに中国人の一般学生の寮に住むこととなる(中国人と密に交流できるためかえって良い)。短期留学奨学金の申請期間を1年にする、他の奨学金に申し込むなど、自身で対応する必要がある。

・選考通過後の手続き、保険等について

インターネット上で北京大学及び中国政府奨学金についてそれぞれ申請書を埋める(事務所の方が指示をくれる)。その後入学許可証が届き、それを持って神谷町にある中国ビザセンターに行き、ビザの申請を行う(中国大使館ではない)。半年の場合X2ビザを申請し、費用は8000円程度(X2ビザは180日間有効だが、中国から出国すると失効する。複数回出入国をする必要がある場合は事前に手続きをすれば可能)。詳細はビザセンターのHPにある。

また、大学が提携する海外保険に加入した。半年の留学の場合健康診断は不要、1年の場合必要。北京大学周辺には数か所日本語が話せる医者が常駐している病院があり、大学で加入する保険を利用することで、原則無料で診察や薬の処方を受けることが出来る。

北京大側は基本的に必要最小限度のことしかしてくれないため、現地に到着後どこにいつ行かねばならないか等は、事前に自身できちんと確認しておく必要がある。また、わからないこと等が生じた場合はきちんと先方と連絡を取り確認すべき。北京大の留学生事務所の方は基本的に英語を解するが、寮の管理人や清掃員、その他大多数の職員は英語が通じないため、コミュニケーションに苦勞するケースがある。

・寮について

1学期目は外国人留学生向け寮に居住した。様々な部屋タイプがあるが、キャンパスアジアプログラムの場合、5号楼に居住し、男女共同(男女は階ごとに分かれている)で2人一部屋である。部屋の中にベッド、机、タンス、簡易な洗面所、テレビ等がある。シャワーとトイレは階ごとに共用。各階に洗濯機及び乾燥機あり。部屋のカードを用いて操作、支払いをする。Wi-Fiは時折切れるが、基本的に安定して使える(チャージ制)。

2学期目は、中国人本科生向けの一般の寮に居住した。35号楼で、元培学院の生徒専用であり、男女共同の寮である(男女は階ごとに分かれている)。4人一部屋

で、長細い部屋に2段ベッドが2つと机が4つ置かれている。部屋の中に水回りは一切なく、シャワー等はすべて階ごとに共用である。なおシャワーのお湯は15～23時のみ出る。全ての階に乾燥機付き洗濯機がある。洗濯機は専用のアプリを用いて予約や操作、支払いが可能。

寮は地下2階まであり、地下には24時間空いている専用の自習室や図書室、無料で使えるビリヤード台や卓球台等がある。週末には有志がスクリーンに映画を映して鑑賞会を開く。1階には自販機がある。Wi-Fiは安定して使用可能。

- 大学内の食堂、生活関連施設について

北京大構内には複数の食堂があり、中国各地の料理が供されている。ムスリム向けのハラールフードもある。特別おいしいということはないが、種類が非常に豊富で、価格も非常に安い(200円程度で基本足りる)。麻辣湯や麻辣香鍋、海南鶏飯等をよく食べた。食堂等の支払いは、学生証を用いる。学生証にプリペイド式に大学のHPや支付宝のアプリ等を通じてチャージする。

また、構内には複数のカフェがあり、コーヒー等を飲むことが出来る。15～30円程度するため日本と大差はないが、勉強をする際等に便利。

加えて、構内にスーパー、ファミリーマート(全家)、果物屋、文房具屋、印刷屋、書店、床屋等があるため便利である。また中国はネットショッピングが非常に便利であるが、住所を寮に設定すれば、荷物を外国人寮の場合寮の近くの歩道を集積所代わりに届けてくれる。また、出前サービスも食堂よりは値が張るが充実しており、頻繁に利用した。

- 生活費及びその他の環境について

仮に1日3食を大学構内で済ませるのであれば、1日当たり1000円に満たず暮らすことが出来る。友人らと外食しても大体150円以内には収まる。生活関連品は日本よりも若干安く、飲料は500ml程度で1～5元。地下鉄は初乗り3元、タクシーは初乗り13円で利用しやすい。特に旅行等の大きな出費はなければ1か月5万円あれば最低限の十分な暮らしはできる。

空気は日本に比べると非常に汚染されている。冬場が取り分けひどいが、他の季節も日によっては急激に大気汚染が悪化することもある。大気汚染情報はアプリで得られるが、大気汚染がひどい日はマスクを着用するか外出を控えるようにしていた。ただ、必ずしも365日すべてが汚いわけではなく、大気汚染がほぼない日もある。

2、 講義について

-1 学期目

1 学期目については既に先学期の報告書で詳述していることから割愛する。

-2 学期目

1 学期目は中国語力が非常に低かったことから、まるで分からない中国語の講義を取り、時間を浪費するよりも、中国語は独学できちんと勉学を進めつつ、講義は英語で学べることを学び取るという姿勢をとっていた。

2 学期目は、決して十分ではなかったが中国語力も少し上昇したため、中国語の講義を受講した。4 科目受講し、うち 3 科目が中国語、1 科目が英語である。以下受講した講義につき概括する。

全て座学でありプレゼンの機会こそあれ、東大とスタイルは変わらないが、興味関心のある分野につき深掘することが出来、非常に実り多かった。

・憲法学

法学院 1 年生の必修講義、中国語。講師は張千帆氏。張氏はアメリカでの研究生生活が長く、中国の憲法界においては際立ってリベラルである。講義は張氏が編纂した憲法学の教科書を使い、西洋の憲法学の歴史や政治制度等を紹介しながら、中国の現行制度や法の運用が抱える問題等についてあぶりだしていく。講義の内容はかなり欧米の事例の紹介に依っていたが、それは裏返せば中国の 82 年憲法が、その理念において西洋の価値観を多分に受容したものであるかを示すものであるし、張氏もそのようなスタンスである。ただし、中国憲法は日本や欧米諸国と異なり憲法にまつわる判例がほぼ皆無なため、少なくとも張氏の議論は理念的なもの、もしくはただの制度紹介に終始してしまう嫌いはあった。しかし、この講義で紹介された事例等を契機として、個人で論文を読むこと等を通じ、中国憲法の条文と運用にある乖離や、政治制度上の問題点を、冷静に議論していくような視点を得ることが出来たと考えている。また、憲法は最高の法であるとして一般にされるが、中国の法運用においては必ずしもその原則は守られていない面があることや、「民主」、「自由」、「選挙」といった概念や制度が示す範囲や内実が、日本や欧米諸国のそれとは違うということなどを、体系的に学ぶに至った。

これをもってして中国が良い、悪い、という話ではない。しかし、張氏はその政治的主張から、そもそも北京大学で講義をするということだけで異例だと話題となっていたし、セメスターの終了後張氏が編纂した教科書は発禁処分を受けた。後者については、他の大学の教授からの批判的な指摘がその端緒とされ、主たる理由は張氏の教科書が三権分立や自由選挙をはじめ西洋の価値観を無批判に

紹介している、というものであった。実際その教科書の内容は西洋の制度等を紹介しており、やはりその方が中国より概して良い、と読むことはできるが、中国共産党の支配自体を痛烈に批判しているわけではない。加えて、そもそも憲法学を学ぶのであれば、82年憲法が欧米の憲法を参照していることも相まって、欧米の憲法を学ぶことは必須であるはずである。中国には独自の価値観があるという議論構造は理解できる(日本においてもその対立軸が殊更に強調されることがある)し、今回の一件の背景は複雑である(教授間の権力争いとも噂された)にせよ、発禁処分事例は中国の状況を象徴していた。

言論封殺そのものより、自己と異なるもの冷静に分析し、そのよしあしを議論したり、自国(自己の文化)を批判的に検討したりしない、できない状況の先にある学問、人文科学が中国で積み重なり、そして引き継がれていくのかもしれないと考えると、心寒くなる。とはいえ、中国側の視点に立てば、日本を含む欧米諸国は、中国を批判してばかりしていて、その内実を冷静に分析し評価してくれない、ということになる。こと政治経済や、社会制度においては信じたいものを信じる、という思考になっていないか。中国に対する態度を含め、学問全体に対しての態度を、間接的ではなるが、学びえる機会となった。

・中国政治概論

国際関係学院1年生の必修講義、中国語。中国政治の概要について「共産党」、「人民代表会議」、「中央と地方」といった重要テーマについて各回概説的な講義を展開していく。中国政治の基礎についてであるから、日本でも学べる可能性はあるが、この講義においては無論「中国」の視点で各制度を評価していく。中国は欧米基準で見た際の民主制度はなく、司法の独立も非常に限定的である。制度上は「民主集中制」であり、郷・県・市・省・全国と幾層にも行政体制が築かれている。そして講義の内容を総合的にまとめれば、現状の中国の政治体制はエリート化、チェック&バランスの欠如などの面で課題が多いが、共産党が政府や軍を指導する体制は、歴史的な帰結であるから正当性があり、中央集権体制は一方で各地域に特色がありかつ多数の民族を抱える中国にとっては合理的である。実際改革開放以降の経済成長や社会改革は共産党支配下においてこそ成功したことであると。

教科書や論文を読み込み、講義の冒頭にある生徒からのプレゼンを聞いていると、段々現行体制を根本的に否定するような考え方が自分の中で鳴りを潜めてくる。様々な行政課題に対して国务院の委員会を中心に熟議がなされる、地方分権の傾向を抑えるために分税制を導入する、単位が崩壊する中で社区を設置し基層組織を再構築する、等々、大きな枠組みの中において、「合理的な」制度設計が

なされていく。そしてその暫時的変化は、まるで日本が90年代に行った政治改革と等価であるように、国が努力して統治機構を改善しているように「感じられる」。この視線は、一方で中国の政治学者等が出来る範囲で精力的に自分の社会を良くしようという学術的営みをしているという事実や中国国民一般の感覚への理解を深めると同時に、言論が統制された社会において「政治」を論じることの限界をひしひしと感じた。

中国に西洋的な「民主主義」や「三権分立」はそぐわない。中国には中国の特色ある歴史的背景がある。確かにそれはそうである。13億人以上の人口と50以上の少数民族を抱える巨大国家にとって、中央集権的な体制はある意味適している。加えて、事実上中央が大きな力を持つ「民主集中制」下においてさえ、地方と中央は緊張関係にあることもあり、地方も大きな力を持つのであるから、人民代表会議を各地域の代表が自由に討議する場となれば尚更であろう。さらに、講義ではトランプ政権の出現等を例に挙げつつ、必ずしも民主主義制度が最善の方向に機能しないことに言及した。

この点は国内外で議論の多い点であり、私のレベルで判断することが出来ない。この一步間違えれば不安定になりかねない巨大国家を統治することに鑑みれば、習近平が任期を撤廃したという事実も見え方が変わってくる。

しかしながら、ほぼ全会一致で法案が通る人民代表大会、國務院の常務委員会で非公開に決定される重要事項、独立していない司法が招く弊害・人権軽視、半ば名ばかりの民族自治区、出世競争を加速させる人事制度が招く過度な開発や汚職等々、仮に一人の中国国民であったとしたら途方もない規模として横たわる問題に対して、北京大の講義でさえ、紹介し議論こそはすれ、核心に迫らず、「中国の特色」という曖昧模糊な思想により丸め込もうとする姿勢は評価できない。そして何より「一帯一路」と世界秩序の形成にさえ関わらんとする国のトップ大学である北京大の、自国の政治に関する講義がこのレベルのクリティカルな思考にしか達しないのも非常に残念であり、そこに国の限界が来てしまうのではないかと感じた。

いずれにせよ、この講義を通じて種々の考え方や論点に触れることが出来た。中国政治を考えるうえで、今後どのような態度、研究姿勢を取るにせよ、重要な基礎を得たことには違いない。

・中国アフリカ関係

国際関係学院の選択講義、中国語。

講師は米国ハーバード大で二つの博士号を取得し、帰国したばかりで、北京大学では1年目である。講義は、中国をアフリカの関係を、歴史、援助を含む経済関係、

移民と、様々な角度から紹介していく。中国のアフリカ進出はしばしば批判的に評価され、それに対して中国が反論するという構図が続いているため、より内面からこの2地域の関係を知りたいと考えた。毛沢東時代の援助や100万人を超えるとされる華僑の歴史と現状など、先入観を排した議論で理解を深めた。また、中国には数十万人のアフリカ出身者がいるが、大きく表面化こそしないが、「黒人」に対する差別的感情が残存しているともされる。この点社会的背景は日本のそれと類似しており、外国人の受け入れやいわゆる多文化共生社会の構築に向けては、中国と共通の課題を多く抱えているように感じた。(無論中国は少数民族を多数抱える多民族国家であるから、純粹に移民として入ってきた、以前から中国の領域内に住んでいたわけではない人々への社会の受け入れ態勢についてである。)

中国のアフリカ支援、投資について欧米諸国を中心に批判されることについては、やはり講義で何度も言及された。氏の見解として、中国の支援や援助は、欧米の援助等が利己的であったり失敗がおきたりするのと同様に、そのような性質を持ち、同時にアフリカ諸国の要望に応え積極的なインフラ投資を行っており発展に大きく貢献している、ということについてデータ等を利用して解説した。実際このような議論を支える論文を英中両言語で多数示した。また、欧米のメディアや見解が世界の主流である中で、話語権がない中国とアフリカは、自己の主張や姿をきちんと国際社会に伝えられていない、ということの問題意識として持ち、中国とアフリカ発の国際メディア(CGTN等)の強化や、英語文献の強化等を提案した。実際別の機会に傍聴した、北京大のアフリカ関係の教授とアフリカ各国の国際関係の教授が集まった討論会では、欧米諸国(のメディア)に対する批判的態度で一致しており、日本ではまず経験しえない、言論空間の存在に気付かされた。

實際上中国の支援や投資が現地の環境や債務に関して問題を抱えていることは間違いないし、(例によって)自己に対して甘い目線は看過できないと感じる。そしてその問題点は他国よりやや多いであろう。ただ、同時に中国が全面的にアフリカを「搾取」の対象とみなしているわけでもなければ、多くの面ではアフリカの発展に貢献しており、個人レベルでは真に国際貢献を目指して考え、働く人がいる。結論的に、中国も日本や欧米諸国と同様に正と負の両側面を持った行動をとっているにすぎないのかもしれないと考えた。しかし、中国-アフリカの外面からは先入観を持ってつい否定的に評価してしまう。今後ますます中国のアフリカに対する影響力が増す中で、頭ごなしの批判ではなく、より投資データや利益の分配の在り方について緻密に思考し、対応していくことが求められる。その中において始めて、投資規模において圧倒的に劣る日本が、どのように中国と競合・共同してプロジェクトに取り組んでいけるか、検討できよう。

また、講義は15人程度しかおらず、比較的少人数であった。従って、周囲に比べて圧倒的に中国語力が劣る中でも、先生からの理解を得ることが出来た。レポー

ト課題や 20 分のプレゼンが課され、必死に準備して時間をかけることで何とかやり切った。自ら書いたり、発表したりすることは語学力に対しては最も有用であり、他の講義もなるべく少人数のものを取ればよかったと後悔している。

・メディアと中国社会

メディア学院の留学生向け講義、英語。留学生専用の講座で、主に書き各会報以後のメディア政策、メディアの状況について扱う。教授が熱心に伝えていたことは、確かに中国には欧米のような報道の自由はないかもしれないが、中国には独自の社会的状況がありきちんと正しいことを伝えていく必要がある、しかも実際不正等を暴いたり、社会問題等について議論したりする新聞や番組もあり報道のチェック機能は存在している、ということであった。後者については確かにそうであり、より厳格に報道規制をしている国に比べれば中国には社会を批判的に考える土壌やメディアが社会を変える機能を持つこともある。この事実はきちんと認識されるべきであろう。しかに南方週末の末路や政府の報道機関に対する指針を見れば明らかのように、教授の言うことはあまりに議論の焦点をずらした詭弁としか言いようがなく北京大の講義としては正直失望した。加えて、ドイツ人の学生が新疆でのムスリムに対する迫害についてナチスと比較しながら話題に出した際には、「それはテロリストを排除して治安を安定化させるためである」という政府の見解に沿った意見を固く、というより純粋に提示し、教室がなんとも言われぬ空気に包まれた。

講義の最後に教授に「中国には独自の事情があり、完全な報道の自由こそ社会安定のためにないものの、きちんと不正を追及するチェック機能のメディアがあり、外国が批判する状況とは異なるということをきちんと理解できました」、と水を向けると「それは非常に良かった、現況まだ中国国内に課題が多いことは確かだが、そういう認識が広まってくれれば嬉しい」と満足げであった。問題点こそあれ、報道・表現の自由の重要性を認識する者として現状の中国のメディアの状況は甘受しがたいが、教授の「とはいえ、中国人もきちんと不正に対して立ち向かっているし、外国から苛烈に非難される状況とは異なる」という「想い」と実際の状況に考えが及び、かつメディア状況に対して冷静にどういう状況であるかを見極める視点を下さった点で非常に有意義な講義であった。実際、この講義を通じ多くの論文や中国メディアに目を通すこととなり、視野が広がった。より大きくは、表現や報道の自由がなぜ重要といわれるか、メディアが社会に果たす役割は、その規制はいかにあるべきか、等々多くの論点に、日本にいる際と別の角度から思案することが出来た。

3、 語学と旅行

・語学について

大学 1 年生の際に中国語を選択し受講しており、中国語を嫌いにこそならなかったが、成績は可を取るなど全く良くなかった。2 年次は中国語のクラスを受講せず、むしろ英語を勉強していたので、2 年の 2 月に中国へ渡った際は、基本の文法知識以外全く中国語を運用することが出来なかった。最初 1 月くらいはお店でのコミュニケーションですらほぼ不可能であった。仕方なく、HSK3 級向けのテキストからコツコツと勉強し、北京大の学生との練習や日常生活の中で中国語を使う中で徐々に習得していった。半年たった時点では、簡単な会話ができる程度だった。2 学期目からは中国語の文献を積極的に読み、中国語の講義にも参加する中で、より複雑なことにも対処できるようになっていった。やはり現地で学生と交流し続けると会話力を得ることが出来る。この点、第 2 学期目に中国人と同じ部屋になれたことは幸運で、度々長時間に渡って話す機会を得た。最終的には、2019 年 1 月に受講した HSK6 級において 249 点を得ることが出来た。現況小説の類でなければ、基本的に読解は問題なく、自分の意見を述べる程度であれば難なくできる。しかし、いまだ聴解力は十分でなく、発音も改善の余地が多い。今後は、中国人留学生との交流の機会や東大の講義を活用し継続的に中国力を高めていきたい。

・旅行/春節について

先学期は南京、大連、青島、新疆等を訪れた。今学期は国慶節及び Semester 終了後の時間を活用して旅に出た。また元培学院の企画で別の地域へ視察旅行に出た。

・鄭州、開封、洛陽、西安

作家のリービ英雄が『我的中国』の中でこの 4 都市を訪問する。氏は 90 年代に訪問しているが、このことに触発され、中国古代文明の中心へと出かけた。

「鄭州」は人口 1 億人を超える河南省の省都かつ東西南北の交通の要衝として急速に発展を遂げており、壮大な地下鉄計画や副都心建設にその勢いを感じる。北京大で知り合った友人が街を紹介してくれ、実家に泊まったが、その家は郊外の、非常に大規模に開発される住宅地区のマンションの一室であった。

「開封」は宋の都であり、以前省都ともなったが現在は大きな経済成長の流れからはやや取り残された侘しい雰囲気のある地方都市である。ただ、街を囲む城壁や鐘楼は往時を偲ばせ、清明上河図のテーマパークや各種遺跡は多くの観光客を引き寄せ

ていた。加えて開封には開発から取り残された回族の地区にユダヤ人街があり悠久の歴史を感じさせる。

「洛陽」も開封と同様に様々な王朝の都として栄え、龍門石窟は圧巻である。旧市街の城壁に囲まれた地域は中国の原風景とでもいうべき屋台街と狭い路地が続く。ただ龍門石窟は文化大革命時に破壊された跡が多く残り、街の南部では鄭州のそれと同じように非常に大規模な住宅開発がなされる。そしてそもそも洛陽は既に古代の都の原型は全く保っていない。この古都が何千年にも渡って目撃してきた歴史に思いを馳せた。

西安は言わずと知れた古都であり、街を四方に囲み何キロにもわたって続く巨大な城壁は圧巻である。街の各所に歴史的な建造物が散在する。街の中央にある回族街がシルクロードの歴史を物語る。しかし街の中心には大型ショッピングモールが立ち並び、いくつもの高層ビルがそびえ立っており、西部地区の経済の中心として発展している様子が伺えた。観光客は他の3都市に比べても際立って多く、中国人にとっての「京都」が人を惹きつける力は格段である。念願の兵馬俑は、国慶節休みとあってすし詰め状態の大混雑であったが、その規模と技術の高さにはやはり息を呑み素直に感動した。この兵馬俑が、秦が滅亡し、歴史から忘れられた後に、不断に幾重にも積み重なってきたこの大陸の変遷を考えると気が遠くなる。そして国慶節のUターンラッシュを避け少し早めに帰京した。

・太原、武漢

元培学院提供の視察旅行で両都市を別の日程でそれぞれ訪問した。既に高速鉄道で北京と結ばれているため、金曜と週末二日を使う比較的短い日程でも十分な時間を取ることが出来る。太原では山西大学が協力のもと、大学キャンパスや研究室、白酒工場、酷工場、山西省博物館等を視察した。取り分け印象的であったのは、研究室では研究者が地域史を熱心に解説し、白酒と酷の工場では工場関係者が「うちの製品が中国一の品質である」と言っ憚らないことである。北京という首都に留学している身として、いわば「わが国自慢」にかくも触れ、実感した。このような経験の積み重ねが、「共産党独裁の下で急速に経済成長を遂げ世界へ影響力を増している権威主義国家」と1つのものと感ぜられる「中国」の複層性、多様性に気付かせてくれる。

武漢は長江河畔の都市として人口が1千万を超える中国有数の都市である。1年前に個人的に訪れたことはあったが、その活気は変わらず健在であった。武漢大学キャンパス、長江イルカ豚の研究室（実際の河イルカが保護されている）、辛亥革命博物館等を訪問した。長江の環境悪化に対してイルカ保護に努める研究者は、純粹に生態系保護に努めており、急成長する大都市圏において環境問題に取り組む姿は今後の中国を象徴しているように思われた。また、中国近代の歴史とともに歩んできた名門武漢大の歴史の展示、（例によって愛国精神を殊に煽るのだが）中国の歴史の流れ

を大きく変える辛亥革命を起こした「中華人民共和国」前の中国の歴史の展示を通じ、20世紀初頭に中国の歴史の中心となった都市の当時の社会、知識人、民衆の状況への理解を深めた。

両都市への視察旅行は交通費、宿泊費、ほぼすべての食費が北京大学から拠出され、無料であった。加えて参加者はサポート係としての北京大生の他、香港・韓国・日本からの留学生が参加する。新たな友人も多くできるうえ、夜はみんなで人狼をやるなど、中国語を存分に使う機会があり（逆に各地のアクセントが強い発音で難しい説明をされたときはほとんどわからなかったが）、勉強にもなった。

・広州、澳門、香港、深圳、長沙、南昌

全てのテストやレポート提出が終了したのち、南方へと出掛けた。深圳までは友人と3人で回った。

北京から寝台列車に乗って広州で降りるとやはり感じるのは「空気」の違いである。極寒の北京と異なり穏やかで暖かく、周囲の人たちの言葉が急に分からなくなる。広東語か南方のアクセントであろう。広州駅は春節で帰郷する人で混雑していた。広州にはアフリカ人街が実はあり、実際街でも黒人の方を北京に比べれば明らかに頻繁に見かける。中国のまた一つ違った姿である。そしてやはり広州の飲茶を始めとする食に魅了され、広州出身の友人が北の料理は美味しくないと言って憚らない理由を実感した。また、6月に新疆で出会った夫婦の方に泊めていただいたのだが、人の縁、優しさに触れた。

澳門は広州から高速鉄道でわずか1時間である。春節の大混雑する広州南駅では列車を一本逃し、更には澳門に入るためのイミグレーションでは1時間以上待たされた。しかし逆に後者の1時間は、「中国公民」用の窓口が「外国人」と別レーンで用意されていたことと相まって「一国二制度」の存在を実感させてくれるものであった。澳門に留学していたポルトガル語学科の北京大生が嘆いていたように、コミュニケーションは中国語で全て事足りる。ただし、あらゆる標識にはポルトガル語が記載され、繁体字が用いられる。そして何より「社会主義核心的価値観」を強調するような政府の宣伝ポスターがない。これらの街の景色の変化は、半年以上大陸にいた身として、「別の」場所にきたことを強く印象付けた。澳門の中心部のところ狭しとアパートが並ぶどこか時間が止まったような地区もじっくり回ったのち、カジノを見学した（賭けられるほどの金銭はない）。国際的なカジノというより、中国語が飛び交う大陸の人間向けという装いであったが、大勢の人が何十万という金額を賭けていくその光景には圧倒される。カジノには高級ブランドが並ぶショッピングモールや一流ホテルが併設される。そしてこのような施設がいくつも立ち並ぶ。その巨大さに呆気にとられつつ、友人と日本で進むIRの整備について議論した。

澳門から香港へはやはり、2018年の秋に竣工したばかりの港珠澳大橋を渡った。広大な埋め立て地に建てられた、真新しい巨大な建物の中にイミグレーションがある。しかし巨大な建物の中は閑散としており、左右6車線の道路を通る車は疎らとさえ言えないほど少なかった。とはいえ、延々と海の上に続く橋を作り上げた技術力と資金力にはただ驚くしかなかった。

香港はさらに雰囲気が変わる。香港人が大陸をすべて「田舎」と見做すという冗談にも頷けた。南アジア系の移民が集まることで知られる重慶マンションに泊まったが、これに留まらず中環付近の金融街はじめ様々な人種の人が行きかう姿は香港が、大陸諸都市がいまだ達していない程度に国際都市であることを印象付ける。香港大の友人に連れられ、香港大で「文化大革命」の講義を受けると、その切り口や講義スタイルは大陸ではなことをひしひしと感じた。香港歴史博物館は（当然といえば当然だが）終始「香港」視点で歴史を語る。取り分け現代史において、日本の占領を「三年零八個月」と表現し、大陸のその後の混乱とは異なり独自の発展を遂げてきた経緯を描く（無論文化大革命時の学生デモや、大陸での災害への支援等影響しあっている）。雨傘運動の中心となった香港政府の前の道路には日常の風景が流れていた。感情的ではあるが今後少しでも香港の「自由」が保たれることを祈るばかりである。

深圳へは、香港九龍駅から高速鉄道でわずか15分の近さである。いわずと知れた中国のシリコンバレーとだけあり、真新しい高層ビルが立ち並ぶ。電子部品や製品の商店が集中する秋葉原のような地区の規模は圧巻であったが、春節前とあって大半のお店が締まっており、統計の通り深圳が外部からの移住者が大半を占める都市であることを実感した。西の地区にはテンセント、百度を始めとした中国のIT企業の本社やスタートアップ企業が集中する。深圳市主導で作られたスタートアップ用のインキュベーション施設と大手IT企業の本社や金融機関、大学がすべて隣接しており、深圳で気付かれているエコシステムの一端を見ることが出来た。

春節で帰郷する人で大混雑の深圳駅から長距離列車に乗り湖南省の省都の長沙へ向かった。そこから高速列車で1時間ほどの韶山に毛沢東の実家がある。北京の天安門広場で毛沢東の遺体を見た身として、ぜひ訪れたかった。韶山の駅から乗ったタクシーの運転手には「外国人が毛沢東の実家に行くとは変わっている」、と笑われたが、少なくとも中国人の間では近年ますます訪問者が増えている「観光」スポットである。生家の数キロ手前から自由に立ち入れない保存地域になっているが、内部は多くの人で「賑わって」いた。毛沢東の生家は寒村の特段特徴のない家であり、毛沢東が農民側、「虐げられてきた民衆」の側にいたことを印象付ける。ただいずれにせよこの寒村から中国、そして世界の数十年間に絶大な影響を及ぼすに至った、人生には素直に感服した。長沙も成長著しい内陸都市のひとつである。あまり滞在できなかったが、ヤシの実ジュースを飲んでも叶わないほどに辛い湖南料理を堪能できた。

中国人が「江西ってどこにある？－南昌じゃない？」と冗談をつくられてしまうほ

ど江西省の全国的な存在感は薄い。ただ南昌は8・1蜂起の土地として共産党支配の現代中国にとり象徴的な都市であり、その他井冈山、瑞金と江西省には共産党に紅色の観光地が多い。8・1蜂起が起きた時点では国共どちらが最終的に勝つかは不透明であったが、現在からみればこの瞬間の中国を作り上げた歴史的に重要な1ページとなり、その蜂起は愛国心を養うことにつながる。(歴史を否定するわけではなく)共産党が作り上げてきた歴史の「ストーリー」に身を寄せていく旅となった。南昌も経済発展が続くがやや出遅れている。そんなこともあってか道端で鳥がつめられているようなローカルな市場が健在であった。このような北京ではほぼ失われてしまった素のままの中国の街角の日常を見られるのが、地方に出かける魅力でもある。

・貴州&春節

秋に貴州省の省都である貴陽市を訪問し、その発展や文化の豊かさを実感するとともに、貴陽市政府の投資局の方々と面会する機会も持った。

また、春節期間中は北京の北京戯曲評論学会会長で東大とも繋がりがあの方のお宅で数日間お世話になり、家族親戚が集まる中一緒に食卓を囲むなどと春節の雰囲気十二分に味わうことが出来た。

これらのことについても詳述したいことは多いが、別の機会にまたまとめ直したい。

4、中国留学で感じたこと

中国で生きる人

留学期間中自身が様々な活動に参加したこともあり、ウィチャットの友人の人数は出国前の60人程度から600人弱まで増加した。この間にあった人との関係はまちまちであるし、無論日本人もその中に含まれるのだが、1年間常に中国人と密に付き合ってきた。同じ年の学生から、社会人、高齢の方まで、様々な立場の人と会うことが出来て、それを通じて、「この巨大国家にも、異なる時代を過ごしてきた複数の世代があり、社会的に様々な立場の人間がいる」という当たり前であるが案外想像しづらいことを、体感的に感じ取っていったことは、現地に長期滞在する留学ならではだ。

「中国人」という括りを設けて、その性質について語るというのは、あまりに単純化が過ぎている。加えて中国では「〇〇后」と世代が括られ、それぞれの特徴が語られるが、経済発展に伴い社会構造が変化し、技術的变化により働きかたや人間関係の在り方に変化が見られ、かつ今後低成長の時代へと入っていく中で、個々人が持つ価値観はより一層変化してくであろう。このことを承知の上で、家族との繋がりを重視する、「内」と「外」の感覚が日本人とは異なる、「人」と「人」の繋がりの重要性、自己顕示のあり方等々、一般に言われているような「中国人の特徴」を、やはり感じ取った。1年もいると何度ごはんを奢ってもらったかわからない。加えて、一般的に言われることでもあるが、この「内」と「外」も感覚の差は、人間関係の中に留まらず、「私」と「公」の感覚の差にも影響を与えるように感じられた。このようなことは、個人の性格というより、社会規範が大きく働いているのだろう。いずれにせよ、このような明文化された法律の外、あるいは（中国では）「上」に確かにある規範や行動様式に影響を与える要素を、人間関係の中で学び取れたのは大きな収穫である。

中国人は見た目が比較的日本人に近いということが傾向として言え、加えて文化的にも比較的近い中で、同じようにものを考えているように思われるが、しかし確かにある差は、やはり長い時間かけて始めて浮かび上がって来るものであった。他者と向き合うときに、異なる社会的背景を持っているかもしれない、同じように世界を見ていないのかもしれない、ということに対しての想像力が養われたかもしれないことは、ひとつまた、この留学をしてよかったと思えることである。

中国の経済と社会—成長とそのひずみ—

私が中学生のとき、日本の GDP は中国に抜かれて世界第 3 位となった。中学受験の際に刷り込んだ知識は覆された。その後 10 年弱がたち、日本のいくつかの大手企業の部門が中国企業に買収され、バイトダンスや滴滴に代表される中国発の企業が日本市場に入ってきた。改革開放以降数多くの日本企業が中国に進出して、大量の廉価な中国製の製品や食品が輸入されてきたが、この経済力を持った日本が中国を「利用」という力関係は、既に変化し、逆流してきている。この中で、ますます日本そして世界に対して影響力を増し、科学技術やシェアリングエコノミーを始めとした新しい分野での革新が続く、中国の経済的な状況を見てみたいと思ったことも留学の動機である。

1 学期目に中国経済に関する講義を受講し、各種論文も読み、多くの学びがあった。様々な縁もあり、いくつかの中国企業を訪問することもできた。加えて、2 学期目にはシェアリング自転車を提供するモバイクにおいて週 1~2 程度であるが、インターンをしていた。ただ、ここで中国経済の構造等について論じても仕方ないので、感覚的ではあるが、現地の気づきを述べていく。

やはり感じることは「緩さ・繁栄」と「厳しさ」の併存である。

官公庁を除けば服装や髪形に基本的に制限はないし（スーツを着ている人間は国営企業でもほとんどいない）、業務の時間や業務中の態度も仕事をしている範囲においては柔軟である。加えて、業務の遣り取りをメッセージアプリで行い、資料のデジタル化が進んでいるなど、企業内においては形式よりも合理性を重視する文化があるように感じる。改革開放から 40 年しかたっておらず、民間の分野においては比較的組織の歴史が浅いことも一因であろう。

店員は業務中にスマホを弄り、タクシーの運転は荒いことが多いが、このような気の抜いても良いと考えるところではきちんと抜いていく合理性が、スピードの早い経済の変化や開発を支えているともいえる。

そして詳述するまでもなく、急速に経済が発展し都市の消費水準は年々向上している。政府が推し進める脱貧困の取り組みは大詰めを迎えようとしている。中国企業は国内で蓄えた資金力、技術力を持っていよいよ世界へと打って出てきている。

一方「厳しさ」とは、現在の中国の経済状況を反映している。IT などの新しい産業は競争が非常に激しく、急な倒産も多い。既存の産業でも国有企業が国主導で生産調整を行うことを通じて雇止めを行うなど、必ずしも安定していない。また、市場の状況を反映してか新興民営企業内での成果主義が際立ち、長時間労働が蔓延している。中国に限った話ではないが、大学生の就職においても、修士号を持っていること

が良い職に就くことの前提となっており、学生のストレスを増加させている。

社会の構造的な問題として、競争に零れ落ちた大部分の人は、低賃金かつ劣悪な労働環境で仕事することが求められる。一流企業の集まる北京の国貿地区の働く、郊外に多く集まる農民工と思しき人の姿は、経済発展がもたらした格差を象徴するものである。とはいえ都市のホワイトカラー層も、家賃や物価の向上、教育費に起因する負担が重く、増加傾向の収入に対して、十分に余裕がある生活を送っているとは言い難い（無論物質面での向上は見られるし、旅行に出かけるなど余暇を楽しむ人も多い）。

前者の「緩さ」と中国企業の躍進には、日本に限らず世界が見習うべき点は多い。しかしながら、後者のような社会課題、生活者としての実感を学び取ったことは、中国社会への見方を複層的にしてくれた。

これは、「中国経済は崩壊する！」というような眉唾ものの本に書いてあるような批判的視点を持った、ということではなく、経済発展に伴い構造的に発生してきた問題そのものを冷静に分析し、社会的にそれを内面から理解していくという作業の単純な結果である。私が見た側面というのはほんのわずかな一側面にしか過ぎないことは承知の上で、どのような社会にもこのような複数の側面があるのであろうから、「社会や経済のあらゆる側面へのアンテナを張り、様々な側面から眼差していく」ということは、今後どのような場所へ行っても持ち続けたい態度である。

ただ、経済成長をすれば民主主義化が進むという古典的な理論に対して、中国がここまで経済発展し、人々の要求や生活上の価値観が多様化してくる中で、1989年の天安門事件以降どうして民主化へ向けた大きな動きが出てこないのか、ということへの疑問はやはり浮かんできた。そのことを含めて次段で考えていきたい。

中国の政治、社会—中国の価値観と「正しさ」—

留学して間もないころの3月、第13期第1回の人民代表大会において憲法が改正され国家主席の任期が撤廃された。「2012年にその職について以来、汚職撲滅運動等を通じて権力を掌握してきたとされる習近平がその長期独裁への道を切り開いた」、などと中国国外のメディアでは強く批判され、中国国内でさえこの方向性に異を唱える人もいた。街のあちこちに習近平の肖像が飾られ、目につくところには「社会主義核心的価値観」の看板。ファイアーウォールにより封じられた海外の情報へのアクセス。「習近平を中心とする共産党独裁の権威主義国家」、という多くの日本人が持つイメージにまるで違わない光景があった。

中国人の友人の意見は様々である。共産党による統治体制は、歴史的経緯から正統性があるし、実際社会の安定に貢献してきたと多くの人は語り、主席の任期撤廃は社会の安定化に資すると素直に評価する人もいた。一方、急速に進む監視社会化に異を唱え、共産党の地位が社会で大きい現状を憂い、時に痛烈に批判する人もいた。他の社会と同じように、中国国内にも多様な意見が存在する。

前者のように現在の状況を概ね肯定する観点は、日本で暮らしてきた私にとり「新鮮」であり、中国から見た世界について理解を深めることに繋がったとともに、終始違和感が残り続けるものだった。西洋と対置した一つの体系としての「中国の価値観」をもとに、現状の政治経済の在り方を肯定する。そしてその価値観は表現の自由や基本的人権といったものを尊重していると謳いつつ、その内実は「われわれ」のものとは異なる。しかし、その論法はそれだけ聞いてみると説得力を持ってくる。このような、自分の中で当たり前と思うような価値体系と「別の」ものを常に突き付けられているが、しかしそれを無碍には否定できない、というある種の葛藤に苛まれ続けた。価値体系というと抽象的だが、政治であれ法律であれ、中国で正当とされる知識や論法に従うと、どこか倫理的に釈然としない、果ては日本であれば明らかに「違法な」結論が導かれる。とはいえこのような意見の対立が生じる理由は、私が「西洋欧米の自由主義」を信奉しているから、なのであろうか。そもそも私自身もときに、「西洋欧米とは異なる独自の文化としての日本」を持ち出して論ずる在り方に共感を覚えてきた。いわゆる「グローバルスタンダード」と「日本」と「中国」の狭間で、どのように社会に向き合えばよいのか、揺らいでしまう瞬間が多く、自身の「正しい」と考えているもの、そして自己を見つめる契機となった。

中国について、どこか「われわれ」と違うものがある、と言ったが、政治体制や市民との関係に関して言えば、「西洋欧米の自由主義」を全面的に採用している国は殊の外少ない。中央アジアや中東の一部の国には、中国よりも厳しい言論統制がなされたり、王族による支配がなされたりしている。そのような国を考えれば、中国共産党

がいかに苦心して人民の声に応えつつ政治体制を維持しようとしているかが浮かび上がってくる。それにとどまらず、言論の自由に関して言えば、やや身近なシンガポールやベトナムもまた、完全に保証されているとは言い難い。従って、中国だけが異常で異質な国である、と見做すのではなく、国民国家体制が行き渡る世界において、それぞれの国の立ち位置をきちんと見つめていかねばならないと学んだ。

ただ、このような中国の現状の先に何があるのだろうか。大学でさえ、常に政治に配慮して議論せねばならない。政治、経済の研究は現在の政府への配慮が常に求められ、「三権分立」や「人権保護」等の政府の体制や実際の施策に関わる、本来賛否両論があり様々な議論がなされるべき分野の議論は、中国の特色ある価値観の下、封殺される。歴史や文学は「中国の4千年の歴史」を強調して中華文明を復興せんとする国の方針の下で意味づけられ再編されていく。一般人はおろか共産党の幹部でさえ、公の場で政府の政策や政府が正統と見做す歴史を否定することはできない。公の場ではない友人との会話でさえ、機微な話題は避けがちとなる。私が留学していた1年の間に、北京大学の教授やの学生数名が、政府の批判や「社会秩序」を乱した、ということで逮捕されたり、停学になったりした。中国においてリベラリズムで通る憲法学の教授の教科書は発禁となり、習近平批判の論文を出した清華大学の教授は教壇に立つことが出来なくなった。

確かに、民間企業の不祥事や一部官僚の不正は時に公に糾弾される。ネットメディアでは個人の社会に対する些細な不満が流れてくることもある。加えて、今回の留学で私が非常に印象を受けたことの一つとして、半ば身の危険を冒しながら、できる限り中立に、学術的に研究を加え、海外の文物に向き合いながら、「自分の」社会をよくしたい、と奮闘する幾人かの学者や知識人に会ったことがある。中国人学生の友人でもそのような人に会った。中国人がみな共産党に心酔している、社会の問題を認識していない、というような日本でしばしばみられる言論は明らかに間違っている。そもそも、「国を愛せ」、「私たちの価値観が（自分たちの社会にとっては）正しい」、というような上からの「正しさ」への要請や、「社会秩序」のために「してはならない、言うてはならない」ことが定められ、社会で共有されるのは、現在の国民国家体制にとりある種普遍的であろう。加えて価値観とは時代とともに変遷していくものである。中国の人権を痛烈に批判する米国でさえ、公民権運動から半世紀しか経っていない。その中で、いわゆる「グローバル・スタンダード」に反発するというのは、「文明の衝突」として自然なことなのだろうか。

これらのことに対して、まず指摘しておきたいのは、社会批判が許容されているのは、すべて管理下の下であることだ。この許容範囲がガス抜き用意され、きちんと正義が果たされていると一般市民に感じさせ、決定的な部分を温存するという管

理体制は、完全な言論封殺にまして、人々の感覚を麻痺させていき、市民自らが、自発的に「問題化しない」、「正しさに追従する」雰囲気を生み出す。決して肯定されうるものではないと考える。

そして、この「正しい価値観」は、大学教授のような圧倒的に少数な一部を除いて、多くの一般市民に共有されていき常識となっていくであろう。この常識は、国家の末端の政治組織（郷等）の施策への不満のような現実社会での人々の不正や不満を解消するものではないが、人々の社会観を構築する。「創られた伝統」は外部との接触やそれを覆す歴史資料の共有で虚構性が明かされるはずだが、その契機をそもそもファイアウォールや言論統制で封殺している。現代社会において世論形成や人々の価値観形成に影響を及ぼしつつあるインターネットの利用が、社会の隅々まで広がった中国において、大半の中国人は（日本人もそうであるように）他の言語でメディアを消費しようという意欲はないし、個別具体的な事件に対する批判を覗けばインターネット上でむやみに社会や政府を批判する危険を冒すことはない。仮に「反社会的な」言動をアップロードしても速やかに削除されるであろう。日本を含むインターネットの自由が担保された国々において近年指摘される問題として、インターネット上において個人が自身の好む情報ばかりを消費して社会の分断が促進されている、フェイクニュースが蔓延し社会の意思決定に影響を与えている、ということがあるが、中国では事実上これらのことが問題化することがない。これらのことをサイバー技術や強固な規制をもってして暗黙裡に問題化させないようにするのが政府の仕事である。この環境下で大多数の人々は社会への価値観を構築していく。

社会における圧倒的少数のエリートたる一部の大学教員は、既に述べたように信念を持ち、誠実に研究しているのだが、中国社会において「正しさ」が押し付けられ、議論が事実上封殺されていくなかで研究はやせ細り、その影響は時間が経つごとにじわじわと広がっていく。現在は、改革開放後に一斉に「輸入された」、中国「外」の思想や理論が学問を鍛え、受け継がれているが、徐々にそれらが中国の手法、価値観で解釈され意義づけられていく。そして確立していく理論が「正しい」ものとなり、他を排除していく。このような状況の先に、「西洋の価値観」と対峙するものを打ち立てられることはないし、あってはならない。中国の歴史や思想は世界に誇れるものであり、市井に残る文化や学者らの研究は私がどうこう評価するレベルではなく深遠で、高度なものであると考えられる。日本の伝統的な文化や思想において、大陸からの要素を排除することはほぼ不可能だ。だからこそ、人文学系の研究において現在の政治や社会の影響を受けることはほぼ不可避であろうが、統制されることのない自由な環境において研究や「価値観」の構築が進むことを願う。この前提において、日本や韓国を含む「東アジア」がグローバル化した社会においてどのような思想や特徴をもつのか、越境的に議論できよう（筆者は夏に再び北京を訪れ、東アジアの学生が集まる学生会議に参加する）。

ここまで述べてきたことに対して、中国において完全に自由な言論・表現の自由がなく、(民主集中制とは言うが) 西洋自由主義の観点からはさすがに政治体制的に民主的であるとは言えないことや、人権侵害とみなされる行為への正当化として、中国が地方によって特色のある巨大国家であり、多様な民族を抱え、取り分け新疆とチベットでは分離独立運動も生じており、適切に言論や表現の自由をコントロールして国を指導してまとめないと社会の安定化が損なわれるということが主張される。人権問題で看過しえない事態は生じていることは違いないと私は考えるが、新疆やチベット等の地域の、国家からの分離独立運動を肯定する言論や運動に対して、中央政府が積極的に首肯することは極めて稀であろう。また現行の政治体制がどのようなものであれ、政府の転覆をはかる言論や運動を違法行為として規制するのは納得できる。この点、政治体制の相違や歴史的経緯により、国際社会の「話語権」を獲得出来てこなかった中国にとり、中国だけが殊更ネガティブにみられて批判される環境があることは違いない。さらに多くの人にとり、このような状況はテロ行為を防ぎ、経済発展に寄与し、中国社会に安定をもたらすという理由から、むしろ好ましいこととして受け取られている。この中国の立場から見た時の感覚は留学に行つて初めて気づいたことである。

一旦、分離独立運動が欧米諸国からの介入により息づいたものであり、現行の政治体制や人権意識が歴史的経緯の産物であり、中国の社会的な実情に実は合致したものであると考えてみる。実際、私は1年間の留学を通じて中国という「他者」への想像力は一段と増したと考えているし、一面的に中国のすべてを、その複層性や多様性をみることなく、批判したり毛嫌いしたりするようなナイーブな考え方は持ち合わせなくなった。加えて、既に述べたような価値観や自分が正しいと考えているものにおける葛藤を通じて、中国にとっての対立項である西洋の社会や価値観が抱える問題へも自覚的になった。とはいえやはり今日本に生きる私として、問題意識として抱えるべきものがあると思われたのだ。

既に述べたように、多くの中国人の方と接する中で、伝統的なことでもあるが人間関係の在り方が重要であると同時に、「公」と「私」の間に大きな分離があるように感じられた。そしてこのことは、中国政府は社会課題に取り組むようなNGOの活動を厳しく制限していること等の外部的環境と合わさり、市民的公共性を生み出すことを難しくしている。

一方、改革開放以降、中国政府はイデオロギーに基づく社会の結合から、経済発展による生活改善に注力してきた。実際その試みは成功し、中国は飛躍的に成長した。科学技術の研究も世界有数になるまでに向上し、イノベーションを興す力は世界随一である。さらに中国政府は貧困を撲滅する運動を推し進めており、中国社会におい

て格差は深刻ではあるが、絶対的な貧困に置かれている人は既に大分少数派となった。中国政府は、アラブの春で長期政権が崩壊した中東諸国とは異なり、人々の生活状況や意見に総論として応え、社会を発展させるために苦心してきたといえる。自らが住む地域の末端の行政機関に個別具体的に不満があったとしても、社会全体に対してのそれは小さくなる。2018年は改革開放40周年を迎え、各種メディアではいかに中国が発展し、政府の施策が正しかったかが喧伝されていた。

この背景の下で、社会を安定させるという目的が、既に述べたような言論や表現の自由が規制されて醸成された人々の社会観の中で、疑うことのないものとして共有されている。そしてその目的を実現する過程において、ある一部の人の生活を困難にしたり、自由を奪ったり、個人情報や過度に収集し管理したりすること、即ち中国が主張するところの「西洋的な価値観としての」個人の尊厳や人権を脅かすようなことまで行われることが、本当に倫理的に若しくは方法的に「正しい」のかを問うことが基本的にない。その侵害が目に見えるものとして自身に降りかかれば別であろうが、遠い誰か他者への想像力は働きにくい。本来そのような状況に対して問題意識を持ち、主張していく学識者たちは、その状況を問題視しない思考体系にあるか、問題視していたとしても、「社会の安定を揺るがす」発言はインターネットにおいては即座に削除されるし、出版物であれば発禁となる。従って、社会的地位が脅かされる可能性がある中で、発言が社会的影響力を持ち得ることもないし、あえて危険を冒さないようになる。新疆やチベットにおいてはそのような発信をする学識者が、そもそも投獄されるなどして自由な身ではないのだから尚更だ。

そしてこのような社会的状況の下で、中国ではテクノロジーの社会実装が急速に進んでいる。今日、ほとんどの国と同様に、治安向上のために監視カメラが街中に設置されているし、個人がネットを利用した情報を企業が活用してマーケティング等に役立てている。国が管理する身分証には国民がどのような過去を持ち、何をしているか捕捉可能なものは全て記録されていく中で、行政手続きは効率化されるし、罪を犯した者も追うことが出来る。「信用スコア」と呼ばれるものが、与信審査を効率化するのみならず、人々の日常生活の行動を「良いもの」へと導いていく。今後AIが社会実装されてくるにつれて、より一層人々の生活は便利になるし、同時に治安も向上するでしょう。

しかし、社会の安定や「便利さ」の実現という目的に対して、人権や個人の尊厳の扱い方についての「正しさ」が問われてこない社会において、このようなテクノロジーが社会の中で人々の行動を記録したり、変化させていったりすることには、大きな危険が伴うと考えられます。例えば、政府や企業が収集した情報、ビッグデータをもとに、人々をセグメント化して監視したり、サービスを変えたりしていけばそれは、個人に優劣をつけて区別、差別することに繋がります。さらに、あらゆる行動の記録は、間接的であれ、個人の信条を覗くこととなり、国家による言論や表現の自由に対

する管理は一層洗練された方法を取って強まります。「信用スコア」を始めとして、テクノロジーを通じて社会に組み込んだアーキテクチャが、人々を「良い行動＝政府がいいと思うもの、社会の多数派がいいと思うもの」に誘導していくとするならば、ここでは独立した人格を持った自由な個人というのは薄らぎ、人間個人としての尊厳が脅かされた状態へとようになっていくとも考えられます。実際新疆ではこれに近いことが発生しているといえるでしょう。現状ディープラーニングを通じて発展している AI が、現状の中国政府の統治に本格的に用いられた場合、セグメント化やブラックボックス化した過程を通じた、「社会の安定化のための」特定の個人や集団の排除や、社会的立場の固定化が加速することに繋がるとも考えられる。中国社会は地域的に非常に多様であり、様々な人々が暮らし、巨大であることを認識しつつ、その多様性の中の差異を超えてくるような、決して既に SF の話ではなくなっている、このようなテクノロジーを用いた統治が、どのように社会に影響を及ぼしていくのか見極めていければと思う。

そしてこのことは中国という「他者」、特有の人ごとの話ではないと考えられる。日本はじめ先進諸国ではテクノロジーの社会実装、統治システムへの導入が進み、個人情報収集や監視社会化が進展しているといえる中で、どのように市民社会と国家が関係性を築いていくか、人間としての尊厳はなんであるかを、中国での状況をもとに考えていかねばならないと思う。

中国の歴史、文化、経済、政治、そして「価値観」にきちんと向き合いより理解を深めながら、一方で表現・言論の自由や人権とはなんであり、そして今後統治の在り方が変容していく中で、どのように捉えるべきか、今後とも考えて行きたい。

最後に

既に述べたことの他にも非常に多くのことを経験し、自分自身のことを含め、考えることとなった1年間であった。語学のスキルという形のある成果もあった。

とはいえ、そもそも「日本」できえ一括りにして語る事が出来ないのであるから、中国は尚更であり、結局人文学の領域において「中国とは〇〇」であると断じるようなことはできない。今後私がどのように経験し、学んでいったとしても常に新しいものに出会い、最後まで分からないことだらけだと思われる。しかし、日本に歴史的にも、現在進行形としても多大な影響を与え、世界的影響力を増しており、豊かな文化や多様な人々を包摂している中国に対して継続的に関わり、向き合っていければと思う。そして他者への想像力を養い、政治であれ、経済であれ、学術であれ、越境して何か創り出せていければと思う。

改めて、今回の留学を支えてくださった先生方、EALAI の方々、北京大学の方々に心から感謝申し上げたい。



憲法學の講義の最終回